

活動報告

## インランディメンションズ国際芸術祭 (InlanDimensions International Arts Festival) 2022の体験記

李知映

Experience of InlanDimensions International Arts Festival 2022

LEE Jiyoung

(2023年3月13日受付, 2023年9月30日発行)

### はじめに

東ヨーロッパにおける芸術の中心地であるポーランド、ここで2019年からグダニスクとポズナン、ヴロツワフを中心にインランディメンションズ国際芸術祭 (InlanDimensions International Arts Festival) が開催されている。

この芸術祭は歴史はまだ浅いが、ヨーロッパとアジアの差別化を拒否する中央ヨーロッパ最大の学際的なフェスティバルとして位置づけられ、お互いに異なる国や文化の架け橋となることを目指し、日本・韓国・中国・香港・台湾などの東アジアの演劇・ダンス・パフォーマンス・映画・ビジュアルアートなど多彩な文化芸術を紹介しているマルチメディアシプリナリー・フェスティバルとして評判が広がっている。

このインランディメンションズ国際芸術祭に、筆者がドラマトゥルクとして関わった作品『水の駅』(作: 太田省吾/演出: 金世一(キム・セイル))が招聘され、2022年10月にポーランドのヴロツワフ市を訪問したのである。短い滞在期間中、芸術祭の関係者らのインタビューも実施出来たので、この紙面を借りて『水の駅』と芸術祭に関して振り返ってみたい。

### 1. ドラマトゥルクの立場からみた 太田省吾と『水の駅』

太田省吾の『水の駅』は完全な沈黙で演じることを前提とした一連の作品群の第一作として、1981年4月転形劇場工房にて初演した以後、1988年までに24カ国、公演回数200以上を重ねた作品である<sup>1)</sup>。

沈黙という特徴と共に俳優たちの動きが非常に遅いテンポで進行されるが、このような特徴は「戯曲(文学)の舞台化」から脱皮し演劇の自立性を担保し表現が力を発揮できる劇言語を探求してきた太田の演劇的態度が基盤になっている。それは直接的ではない意味を含んでいて能動的に明確なことを提示するのではなく、伝達されにくいことを通じて人々を自ら考えさせる方式でもあると言える。

太田は、近代的なものの見方は本来多義的で豊かな人間という生命存在を抑圧しているとみなす。彼によれば、行動や言葉によって表現される西洋由来の近代演劇は人間や社会を要約し概念化して劇的に描くものである。そして今日の私たちがテンポの速い社会に対応するために行っている人生や社会で意味のない部分を削除して要約し概念化することは、この近代演劇的なものの見方に他ならない。フィクションである演劇が本来なすべきは、こうした要約を停止することである。そう考えた太田は、実生活の中で大部分を占める沈黙の時間に注

目し、言葉を介在させず極端にゆっくりとしたテンポで動くことで、生命存在としての人間の領域を表現しようとした<sup>2)</sup>。これが太田が言う「沈黙劇」である。

スタニスラフスキー、ミカエル・チャーホフ、ピーター・ブルック、グロトフスキのような芸術家たちが、修行、訓練などを通じて高次元的な意識を志向する「永遠の哲学」から多くの影響を受けたように、太田もこの「永遠の哲学」を演劇に盛り込む。社会的規範、価値、名誉、業績、偏見など人間の意識に蓄積された社会的枠組みを越えて「今、ここ」に現存する生命と肯定の美しさを演劇を通じて伝える。

沈黙、遅い動き、水の音、音楽の精巧な構成で俳優と観客が「本質的自我」に合わせようとする太田の現存の美学がこの『水の駅』の作品でよく現れる。

## 2. ヴロツワフ市と

### インランディメンションズ国際芸術祭2022

ヴロツワフ市は、ポーランド南西部に位置する第4の都市であり、観光地として良く知られているワルシャワ市から列車を使うと3時間半、飛行機を使う場合は約1時間の距離に位置している。このヴロ

ツワフは、日本の演劇界でも知られる伝説的演出家イエジー・グロトフスキ (Jerzy Grotowski, 1933-99) が拠点を置いていた「演劇の町」でもある<sup>3)</sup>。旧市街地にはグロトフスキの作品と、文化、演劇を研究するセンターとしてグロトフスキ・インスティテュート (Grotowski Institute) がある。

太田省吾と劇団「転形劇場」が最初の海外公演として選んだ場所がポーランドのワルシャワであり、作品は『水の駅』(作・演出：太田省吾)。1983年5月のことだった。その40年後、演出家・俳優の金世一氏が主宰する劇団「世 amI」(東京に拠点を置く) とアートマネジメントセンター福岡の共同事業の形として『水の駅 (The Water Station)』(上演時間2時間40分) が芸術祭に招聘され、2022年10月6日、7日の二日間、ポーランドヴロツワフにて上演されたのである。

インランディメンションズ国際芸術祭2022には日本から劇団「世 amI」以外にも平田オリザの「青年団」が『ソウル市民』、金守珍(キム・スジン)の「新宿梁山泊」が『恭しい娼婦』、三浦基の劇団「地点」が『ギャンプラー』、その他がラインナップされた。本芸術祭はポーランド各地で9月16日から続いて



図1 「グロトフスキ・インスティテュート (Grotowski Institute)」手前の壁画『グロトフスキに捧げる』(作家不明)  
(筆者による撮影2022.10.7)

いてその最後を飾り、『水の駅』がヴロツワフ市で上演された。

『水の駅』の二日目にして最後の舞台であり、同時に芸術祭の最後の公演でもあったため、19時に開演予定だったが、挨拶もあり、10分以上おくれて始まった。終演は22時半を超え、アフタートークが始まった頃、時刻はすでに23時近かったにも関わらず、多くの観客が席を離れることなく最後まで残ってアフタートークまでにも参加していた。

アフタートークは、ヴィトカツィの芝居『狂人と尼僧』（1992年）に出演するために来日したこともある、プロデューサー・俳優で2016年からはクラクフ市のスウォヴァツキ劇場総監督を務めるクシシュトフ・グウホフスキ、演出家の金世一、芸術祭のアンバサダー関口時正、芸術祭の総監督ニコデム・カロラクの四人に加え、客席にいた招待客の演劇翻訳家・演劇雑誌Dialogの編集者マウゴジャータ・セミルにも特に発言をお願いする形で行った。特にこのセミル氏は40年前の太田演出の『水の駅』を見ていた人でもあり、その時との比較も含め、発

言されたのである。

紙面の関係上、ここでアフタートークで出た話を全部紹介することはできないが、関係者や観客から出た感想についてごく一部だけを言及すると、「俳優の雄弁で饒舌な身体に圧倒された160分」、「役者の一挙手一投足まで美しかった」、「圧倒された。衝撃のあまり私は痺れている。たぶん前回（筆者注：40年前の太田演出のもの）よりもいい」、「今年最大の収穫」、「演者たちの視線と表情だった。明らかにそれらは制御されていた。表情は、わずかな角度で泣き笑いする能面のようでもある」<sup>4)</sup>等といった感想があった。

『水の駅』が上演された「ピェカルニャPiekarnia」（通称：ベーカリー）は、前述したグロトフスキ・インスティテュートが2019年から管理する多目的空間である<sup>5)</sup>。1901年に建てられた軍用製麺所が欧州連合の補助金も得て改築され、アートセンターへと生まれ変わったのである。このようにリノベーションしたのはごく最近らしく、この建物の中には劇場、15戸の住宅、企業のオフィス、画家のアトリ



図2 『水の駅』上演写真

(InlanDimensions International Arts Festival 2022, photo by Tobiasz Papuczys)





図3 「ピェカルニャ Piekarnia」 外観（裏、表）及び内部（仕込み中）  
（筆者による撮影2022.10.4）

エや映画スタジオも入っている。中でも最大の規模を示しているのが劇場の空間である。600平方メートルの広さのスタジオスペースには、最新のビデオマッピング機器を含む、照明、音響、マルチメディア、ステージなどのプロフェッショナルなシアターシステムが装備されている。また、140平方メートルの広さのホワイエもある。最大400席の移動式講堂のシステムにより、スタジオスペースを自由に配置できるため、劇場公演、音楽イベント（クラシック音楽やジャズ音楽のコンサートなど）など、2～3個のイベントをここで同時に行うことができる空間である<sup>6)</sup>。

インランディメンションズ国際芸術祭は2019年から始まったばかりのものであり、パンデミック期間を含めるとこの芸術祭はこれからは芸術祭として本格的に発展していくと考えられる。ヴロツワフ市にはグロトフスキ・インスティテュートを含む演劇という確固たる文化資源があるので、この芸術祭がその資源を活かしながら国際交流、とりわけ東ヨーロッパと東アジアの交流を深めながら成長していくことを見守りたい。

#### 謝辞

本稿は科学研究費助成事業（19K13023）助成金の交付を受けたものである。

#### 注

- 1) 太田省吾（おたしょうご、1939年9月24日 - 2007年7月13日）は中国済南市生まれで、6歳まで北京で過ごし、敗戦後引き揚げた。学習院大学政経学部中退後、発見の会を経て、1968年に劇団転形劇場を旗揚げし、1970年より主宰となる。同劇団の演出家兼劇作家として活躍し、『小町風伝』（1977）で岸田国士戯曲賞、『水の駅』（1981）で紀伊国屋戯曲賞された。『水の駅』をはじめとする無言と緩慢な動きと劇作・演出の中心とした「駅シリーズ」で特に知られる。1988年に劇団が解散したのちは、藤沢市文化センター芸術監督、近畿大学教授、京都造形芸術大学教授を務めた。随筆集には『裸形の劇場』『劇の希望』『舞台の水』などある。
- 2) 太田省吾（2008.9）「日本の演劇における伝統と近代」『舞台芸術』13, pp.4 - 8.
- 3) ピーター・ブルックと共にアバンギャルド演劇の初期走者であり、現代西欧写実主義演技訓練法に対する一種の代案的演技訓練法を創案した演出家で、ポーランド生まれの俳優、演出家、演劇理論家である。
- 4) アフタートーク（2022.10.7実施）の内容から抜粋。
- 5) このピェカルニャを演劇舞台として最初に使ったことから落としは、2019年4月25～27日、パリのテアトル・ブッフ・デュ・ノール座による、ピーター・ブルック演出の『囚人』。（[https://www.mizunoeki.online/?page\\_id=834](https://www.mizunoeki.online/?page_id=834), 2023年3月11日閲覧）
- 6) グロトフスキ・インスティテュート芸術監督のJaroslaw Fret氏のインタビュー（2022.10.7実施）及びマネジャーのDominika Nestorowska氏のインタビュー（2022.10.5実施）

#### 文献等

- 太田省吾（2007）『太田省吾劇テキスト集』早月堂書房  
太田省吾（2008年9月）「日本の演劇における伝統と近代」

『舞台芸術』京都造形芸術大学舞台芸術研究センター  
西堂行人(2021)『ゆっくりの美学:太田省吾の劇宇宙』作  
品社

グロトフスキ・インスティテュートマネジャーのDominika  
Nestorowska氏のインタビュー (2022.10.5実施)

グロトフスキ・インスティテュート芸術監督のJarosław  
Fret氏のインタビュー (2022.10.7実施)

#### 付記

[<https://inlandimensions.com/2022/pl/>] (2023年3月11日  
閲覧)

[[https://www.eu-japanfest.org/projectsupport/program2022/  
show.php?user\\_id=185](https://www.eu-japanfest.org/projectsupport/program2022/show.php?user_id=185)] (2023年3月11日閲覧)

[[https://www.mizunoeki.online/?page\\_id=834](https://www.mizunoeki.online/?page_id=834)] (2023年3月  
11日閲覧)

[<https://grotowski-institute.pl/o-nas/>] (2023年3月11日閲覧)